

訳者あとがき

『クラリッサ』個人全訳の仕事を思いついたのは、一九八〇年代も終わろうとしている頃であった。一九八九年がリチャードソンの生誕三百年目に当たることもあり、この時期、リチャードソンや『クラリッサ』の名が、イギリス小説に関心を持つ者たちの間でしきりと話題になっていたのである。一九八八年五月の第六十回日本英文学会大会では、『クラリッサ』を読む」と題するシンポジウムが開催されたし、その前年の十一月には、Terry Eagleton の注目すべき論考 *The Rape of Clarissa* (Basil Blackwell Ltd, Oxford, 1982) が、大橋洋一氏の翻訳により、『クラリッサの凌辱』として岩波書店から出版されていた。また、Clarissa Project の一環として、『クラリッサ』第三版の復刻出版が予告されていたのである。

作家論や作品論を中心とした文学研究に行き詰まりを感じ始め、打開の道を模索していた当時の訳者にとっては、このような動きの中に一つの可能性が見出されるように思われたのである。そして、非力をも顧みず、『クラリッサ』個人全訳を自らのライフワークと位置づけ、AMS Press から出たばかりの第三版復刻版を急ぎ取り寄せると、見境もなく、無謀な作業に取り掛かったのである。一九九一年四月二日のことであった。

そして、十三年近くを経た今、再び乱暴な行動に踏み切ることとなった。(本)の常識からするならかなり不完全な状態のまま、日本語版『クラリッサ』を web に公開しようというのである。浅学ゆえの誤読や思い違いが多々残っていることを恐れるし、生硬な訳文にはさらなる推敲も必要であろう。表記上の問題としては、縦書きでの発表を前提として出発しながら、急遽横書きに変更したという経緯があり、漢数字とアラビア数字の使い分けに統一性を欠くこととなってしまった。また、第三版の特徴の一つとして(はしがき)で触れられている、最初の原稿からの復元部分を表示する(小点)については、見た目の煩わしさを考え、原文どおりに再現してはいない。さらに、訳者としては、訳注の不備も気になるところである。出典箇所をいまだ特定出来ずにいる引用句がかなりの数に上っているのだが、これだけ情報化の進んだ時代でもあり、時間を掛ければ、その大部分はおそらく解決するはずなのである。

にも拘らず、今この段階で公開しようとする理由は二つある。一つは極めて私的なもので、わざわざ触れるべきではないのかもしれないが、訳者の定年退官の年であり、大きな節目の年に一つの区切りをつけておきたいというわけである。もう一つは、web を利用するという、その公開方法の特性である。通常、一冊の(本)が出版されるまでには、多大の労力と時間、そして費用を必要とするし、経済的要素が絡んで、改版も簡単なことではない。四百字詰め原稿用紙に換算すると、全体ではおよそ九千五百枚を超える長大な作品のことであるから、(本)の形での出版は多分無理であろうし、仮に出版されたとして、その必要が生じた場合にも、改版にはさらに大きな困難が予想されよう。一方、web による公開の場合には、改訂版の配信があまり手間を掛けずに、時間を取ることもなく可能になるのである。これは、別な見方をするなら、テキストの不安定さ・不確定性を如実に物語っていることにもなるが、テキストに対する旧来の価値観からすればマイナス要素と言って構わないこの特性を、逆に利用しようという魂胆なのである。

ただ、荒削りで不完全な形で公開とはいえ、宝玉ともなりうる原石の掘り出しに、と
りあえずは成功したと言つて構わないのではないだろうか。さらに言えば、ルソー、ゲー
テらを筆頭に、十八世紀以降のヨーロッパ文学界、思想界に極めて大きな影響を与えた原
作が、ようやくにして日本語となって世に出ることの意義は、決して小さなものではない
ようにも思うのである。これからは、文字どおりのライフワークとして、時間を掛け、ゆ
っくりと磨いて行くつもりである。また、この公開方法には、読者諸兄のご意見を反映し
易いという大きな利点もあるだろう。訳者による不注意な読み違い、入力ミスや変換ミス
など、お気づきの点をご教示くださるよう、切にお願いする次第である。随時、修正や改
訂を加えて行きたいと考えている。

この仕事を進めるに際して、数多くの辞書・事典類を参照したが、特にお世話にな
ったものについては、その名をここに記し、感謝の意を表したい。すべての面で信頼を寄
せ、最も多用した辞書は *The Oxford English Dictionary* であるが、主としてその compact
edition (1971) を利用した。また、Samuel Johnson の *A Dictionary of the English
Language* の復刻版 (Georg Olms Verlagsbuchhandlung Hildesheim, 1968) も頻繁に参
照した。ギリシア・ローマ神話を含め、地名・人名等の固有名詞の表記法については、特
別な場合を除き、研究社の『リーダーズ英和辞典』(第一版、一九八四、第二版、一九九九)
と『リーダーズ・プラス』(一九九四)に依拠している。これらは固有名詞の収録数が多く、
統一が取り易かったからである。聖書からの引用の日本語訳は、指示のない限り、日本聖
書協会発行の新共同訳『聖書』(一九九五)に基づいている。また、ラテン語引用句の日本
語訳については、『ギリシア・ラテン引用語辞典』(「新增補版」(岩波書店、一九六三))の
ものを借用している。なお、この辞典に収録されていないラテン語引用句の日本語訳につ
いては、同僚である北海道大学言語文化部の川寄義和先生にご助言とお力添えをいただいた。
心からお礼申し上げたい。

ところで、訳注をご覧になると、(Ross) と付記されているものが多いことにお気づき
であろう。翻訳作業を進めるに当たっては、底本として用いた第三版の復刻版とは別に、
Everyman's Library 版 (四巻本、一九六五) と、初版に基づいている Penguin
Classics の版 (一巻本、一九八五) も校合のために併読したのであるが、この一巻本の巻
末には、Angus Ross による詳細な *Notes* と親切な語句解説 GLOSSARY OF WORDS AND
PHRASES が添えられているのである。訳者も大いに参照させてもらったわけであるが、
(Ross) という注記は、それらからの借用ないし翻案であることを示し、併せて、学術的
に貴重なこの労作に敬意を表すためのものなのである。

さて、〈本〉の形で出版を諦め、CD による公表を検討していたところ、同僚の河合剛
先生のご提案とご尽力により、北海道大学英語教育系の機関紙 *The Northern Review* の電
子版化が一気に達成されることとなり、このような形で公開が可能になったのである。
CD による公表を目指した場合には、〈本〉の場合と同じことで、推敲を重ね、不備を解消
したいという誘惑に勝てず、おそらく公開はさらに数年遅れることになっていただろう。
最後になったが、河合剛先生にも心からお礼申し上げたい。

なお、つい先日のことであるが、河合先生を通して、山梨大学工学部の石田朗先生が第
二巻に折り込まれている楽譜を MIDI file 化してくださったとのことであり、さらにそれ
を河合先生が本文中に挿入してくださるといふ。最初は独立した別ファイルとして後置さ

れていたのであるが、これで原作に近い形で『Ode to Wisdom』を楽しんでいただくことが出来るだろう。重ねて河合先生に、そして、石田先生に感謝申し上げる次第である。

訳者

二〇〇四年三月

改訂版について

不完全な状態であることは承知の上で、『クラリツサ』を急ぎwebに公開したのは、昨年三月のことであったが、読み返してみると、案の定、思わず赤面したくなるような入力ミスや変換ミスが目についた。そこで、とりあえず特に目立つものを校正し、四月と六月の二度に亘り、ファイルの更新を行なった。その間、目に見える形、手に触れることの出来る形にしたいという気持ちも抑え難く、九月にはCD-ROMを作成し、一部の方々にお届けした。その後も、暇を見ては校正の作業を続けていたのであるが、すでに目を通したはずの箇所にところどころ見落としがあることを知り、非力さを思い知らされるとともに、拙速を後悔する羽目にもなった。

訳者としては、視力の衰えという極めて不利な条件を抱えており、膨大な作業を前にし、ばし手を挟んでいたのであるが、幸いにも、学生諸君の協力を得られることになった。非常勤講師として担当しているクラスの一部受講生が、冬休み中の自由課題として、『クラリツサ』全巻に目を通してみようと言ってくれたのである。文章の校正作業というのは、どういうわけか、執筆者以外の人間に委ねるほうが好結果をもたらすものであるが、学生諸君の若く、そして、健康な目は、苦もなく百例近くの入力ミス・変換ミスを見つけ出してくれたのである。

それでもなお、相当数の誤植は残っているであろうし、訳注の不備に関しても、訳者の怠慢から、依然として手付かずのままである。にも拘らず、「改訂版」と銘打ってファイルを更新するのは、他でもなく、出来るだけ早い機会を捉えて、学生諸君の協力を謝意を表したかったからである。ここにその旨を記し、心からの感謝の言葉に代えたい。

なお、第二巻の本文中に挿入された『Ode to Wisdom』については、現在のところ、残念ながら自動的に演奏される仕組みにはなっていない。後置の別ファイルにより、ハープシコードの演奏をお楽しみいただきたい。

訳者

二〇〇五年五月

二〇〇六年改訂版について

昨年五月に改訂版を公開した後も、暇を見ては、校正の作業に携わっていた。これだけ長大な作品になると、見直すたびに何かしら誤植の類いは見つかるもので、新たに相当数の訂正を行うことが出来た。神経を使い、時間の掛かる作業であるが、無駄骨に終わることとはなさそうである。今後ともこの地道な仕事を継続しようと考えている。

校正作業のかたわら、訳注の不備を補うべく、とりわけラテン語引用句の出典を確認すべく、鋭意努力を続けていたのだが、こちらの作業は思うようには進まなかった。学生時代に少しラテン語をかじっただけで、small Latin and less Greek という状態にさえ羨望の念を禁じえない訳者であるから、第七巻に見られる、かなりの数のラテン語引用句の出典を探る術もなく、途方に暮れていたのだが、たまたま出講先でお会いした北海道大学名誉教授で古典語を専門としておられる、田中利光先生に事情をお話ししたところ、快く調査検索の労をとってくださいました。そして、短時日のうちに、多くの出典箇所を特定するのみならず、引用句のいくつかについては、その英語訳をもご教示くださったのである。ラテン語引用句に関する不備が大幅に改善されたのは、ひとえに先生のご協力によるものである。この場を借り、田中先生に心から感謝申し上げたい。

ところで、つい先頃、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』で〈サミュエル・リチャードソン〉を検索して気づいたのだが、訳者のこのサイトにリンクが張られているのである。わずかずつではあるうが、電子版『クラリッサ』に関心を持つ人が出てきているのも間違いないようである。それだけに訳者の責任は重くなる。この翻訳作品を少しでも良いものにすべく、今後とも校正と注付けの作業に従事することを、改めて心に誓った次第である。

訳者

二〇〇六年十一月

二〇〇七年四月改訂版について

二〇〇六年改訂版をアップロードして間もなく、田中利光先生から貴重なご指摘をいただいた。ラテン語引用句に関して頻繁に参照した、田中秀央・落合太郎編著になる岩波書店の辞典を、訳者は『ギリシヤ・ラテン引用語辞典』と表記していたのだが、正しくは『ギリシヤ・ラテン引用語辞典』となっているとのことのお話であった。

日頃から Greece, Graecian, Greek 等の訳語として、何の疑念もなく〈ギリシヤ〉という表記を用いていたため、少々驚いたのであるが、改めて周りの書物を眺めてみると、研究社の『新英和大辞典』第五版や『広辞苑』の第一版等、やや古いものの中には〈ギリシヤ〉表記を用いているものも無いことはないが、圧倒的に〈ギリシヤ〉表記が多いのである。

例の『Wikipedia』の記事によると、国名に関し、「日本語による表記は**ギリシヤ共和国**。通称**ギリシヤ**。歴史・地理・人文系では**ギリシア**という表記もされるが、国会の制定法や外務省、およびギリシヤの在日大使館のサイトではギリシヤと表記される。漢字では「希臘」と表記され「希」と略される(例えば、ギリシヤ語を希語と書くなど)。ギリシヤ、ギリシアという名称は、ラテン語名の Graecia (グラエキア)がポルトガル語で Grecia (グレシア)となり、これが宣教師によって日本にもたらされ変容したとされる」とのことであるが、どちらの表記法を選ぶにしても、決め手となるほどの根拠はなさそうである。周囲の現況から推測するなら、どうやら〈ギリシヤ〉表記に分があるように思われるので、こちらの表記法を採ることとし、改訂を行った次第である。

同じように、不確実であるが可能性はあることを意味する「…かも知れない」という言い回しも、現在ではかな表記が一般的なように思われるので、これからはかな表記に改めることとした。

訳者

二〇〇七年四月

二〇〇九年一月改訂版について

月日の経つのがまことに速い。Clarissaの全訳をweb上に公開したのは二〇〇四年三月であったから、すでに五年近くが経過したことになる。その間、情報技術の進歩と普及には目覚ましいものがあり、訳者のように、コンピュータやインターネットに関する基礎的な知識すら持ち合わせない人間にとっても、この進歩・普及の恩恵に浴することが可能になっている。Project Gutenbergなど、いわゆるe-bookを揃えたサイトへのアクセス、そして、そこからのダウンロードがいとも簡単に出来るのである。そのため、引用語句の出典の検索は、以前に比べ、格段に容易になった。情報技術や情報化社会に潜む危険性についての論議を知らないわけではないが、今回の改訂に当たっては、こういった新しい技術を大いに利用させてもらい、不備の多かった訳注の補完・充実を目指したのである。併せて、訳文の校正についても、これまで見落としていた誤訳と思われる箇所や脱字・誤字の類も相当数改めることが出来たように考えている。

ところで、底本として用いた第三版復刻版の誤植についてであるが、Introductionの四十四頁に見られるA Note on Errors in the Third Editionの記述とは裏腹に、全巻を通じて様々なErrorsが散見されるのである。中でも不都合なのは数字の誤記であろう。今回の校正作業では、第八巻巻末に添えられているA COLLECTION OF SUCH OF the Moral and Instructive Sentiments…に付記された巻と頁の確認も行ったのであるが、同定出来ないものが数例残ってしまった。おそらくこれは、数字が間違っているためなのであろう。実は、原文の三百十七頁のCensure, Characterの直前の文章には、iv(巻)145(頁)と該当箇所を指示してあるのだが、確認調査の結果、これは第五巻百四十五頁からの引用であることが判明した。同じように、三百十八頁七行目のvi. 169は第五巻百六十九頁であり、三百四十四頁二行目のv. 221は第六巻百二十七頁のほうが正しいのである。拙訳においては、このように引用ないし参照した箇所を跡付けることが出来たものについては、正しいと思われるほうの数字を示してあるが、跡付けの不十分なものについては、原文で示されている巻と該当するように思われる訳文の頁とを記してある。また、本文中にも数字の誤記が数例見受けられるのであるが、これらは訳注において修正していた。

なお、これら誤植については、『日本ジョンソン協会年報』No.27(日本ジョンソン協会May 2003)収録の拙稿「April 6 or April 9? — Clarissa 第3版の誤植について」を参照いただきたい。

訳者

二〇〇九年一月

一月二十八日に更新したファイルを見直していたところ、第八巻二百十三頁の注(8)の後半部が、何らかの原因で改ページされ、次頁の一行目に送られていることに気付いた。これを修正し、併せて、訳注の頁と行の指示にズレの生じたものを改め、改訂版を急ぎアップロードした次第である。

訳者

二〇〇九年二月一日

縦書き表記版について

『クラリツサ』の邦訳に取り掛かった当初は、本の形での公表を念頭に、縦書きで仕事を進めていた。ただ、この作品の圧倒的な長さのことがあり、原稿用紙への筆記は無理と思いい、パソコン上での作業を選ぶことにした。ところが、これは単なる慣れの問題にすぎないのであるが、最初のうちは、縦書きの操作に戸惑うことも少なくなく、作業に停滞を来すことすらあった。そこで、全巻の一次訳を出来るかぎり早期に完了することを最優先し、途中から横書き表記に変更し、校訂の作業も含め、二〇〇九年一月改訂版まで、この表記法を続行したのである。

この間、パソコンや携帯電話の普及により、電子メールが我々の生活にとって不可欠な通信手段になっている。そして、そこで用いられる横書き表記は現代の日本人、少なくとも若者たちには、何の抵抗もなく受け入れられているようである。また、ここ数年のうちに書店の一角を占めるに到った、いわゆる〈ケータイ小説〉の場合、当然ながら、そのほとんどが横書きで印刷されているようであるし、翻訳を含む最近の〈純小説〉作品の中にも、横書きで出版されたものがいくつも見受けられるのである。書簡体小説はまさしく郵便物であり、メールなのであるから、電子版『クラリツサ』の横書き表記は、正当化される、時代に即した表記法である、とさえ言えないこともないのかもしれない。

しかしながら、古い世代の日本人である訳者としては、横書きでの作業に何かしらしくくりしないものを感じ続けていた。これは趣味の領域に属する事柄であろうし、確かな論拠などは持ち合わせないのだが、たとえパソコン等の画面上でのことではあっても、日本語で書かれた文学作品、とりわけ小説は、やはり、縦書きで読みたいという気持ちを抑えられなかったのである。

「横の物を縦にもしない」という言葉は、非常に不精なことの譬えであるが、また同時に、横の物を縦にするというのは、極めて容易で簡単な作業である、という意味合いも含んでいることになるだろう。しかし、電子版『クラリツサ』の縦書き表記への変換は、思いのほかの難事業であった。主としてアラビア数字を漢数字に置き換えることから派生する不都合であり、この置換によって、文字数に変動が生じてしまうからである。文字数に変動があると、ひいては行数にも変動が起きる。そうすると、全八巻ではかなりの数になる原注、そして、訳注が指示している該当箇所にもズレが生じてしまうのである。まことに細かな、神経を使う作業であったが、一年あまりを費やし、なんとか完了することが出来た。そして、この見直しの作業を通して、誤訳と思われるものや入力ミス、変換ミスを

相当数見つけ出し、訂正することも可能になったのである。無駄な骨折りではなかったということになるのであろう。

ところで、訳注の作成に当って参照したウェブサイトへのアクセスを試みて判明したのであるが、そのうちのいくつかは、閉鎖されたのか引越しをしたのか、現在、アクセス不能の状態になっていた。情報の収集や発信の手段として、画期的に効率的なウェブサイトであるが、現段階においては、学術的資料として全幅の信頼を寄せるわけには行かないということなのであろうか。

なお、現在アクセス不能のウェブサイトについても、いつの日か再開されることを夢見て、その URL を残しておいた。

訳者

二〇一〇年十一月

二〇一二年六月改訂版について

相も変わらず校正作業を続行しており、入力ミスや変換ミスに起因すると思われる、かなりの数の誤字・当て字の類を訂正することが出来た。ただ、いまだに出版を特定出来ない引用語句が相当数あり、訳者としては不満の残るところであるが、とりあえず、現在までの成果を公表することにする。

今回の改訂版に見られる主な変更点は次の二つである。即ち、

(一) これまで「表紙」の中に含まれていた第一巻のタイトルページを第一巻の巻頭に置き、他の巻との整合性を図った。

(二) 各手紙の頭語と結語に関しては、英語表現をほぼ無視し、日本語手紙文の慣用表現を適宜使用していたのであるが、今回は、逐語訳に近い形で、出来るだけ英語の語句に忠実な訳語を与えることとした。英語手紙文の場合、巧みに結語へと導く結末部の言い回しは、手紙作者の腕の見せ所となっているかにも思われるからである。

なお、「訳注」における漢数字については、作品の手紙番号の場合を除き、十、百、千等の単位を示す数字を用いない表記法を採用した。

訳者

二〇一二年六月

二〇一五年五月改訂版について

拙訳の初版から二〇一二年六月改訂版まで、主人公 Lovelace のカタカナ表記については Daniel Jones の *ENGLISH PRONOUNCING DICTIONARY Twelfth Edition* (J.M. Dent & Sons LTD, 1963) 等が示している標準的な発音に近づけるよう、(ラヴレイス) を使用してきたのであるが、先般、『イギリス文化事典』(イギリス文化事典編集委員会、丸

善出版株式会社、平成二十六年十一月）に一項目を執筆するに際し、昭和二十九年三月の国語審議会報告「外来語の表記」と平成三年六月の内閣告示第二号に準拠した形で、〈ラヴリース〉を用いることとした。「外来語原音における二重母音の〈エイ〉〈オウ〉は長音とみなし、長音符号（ー）を添えて示す」という指針に従ったわけである。

しかし、国語審議会自体が認めているように〈エイト〉や〈ペイント〉等々、すでに表記が固定しているものや、例外とすべきものも少なくないため、拙訳全巻を通して、人名や地名を含む外来語のカタカナ表記を見直し、新村出編『広辞苑 第六版』（岩波書店、二〇〇八年一月）も参照しながら、その一部に変更を加えた次第である。

訳者

二〇一五年五月